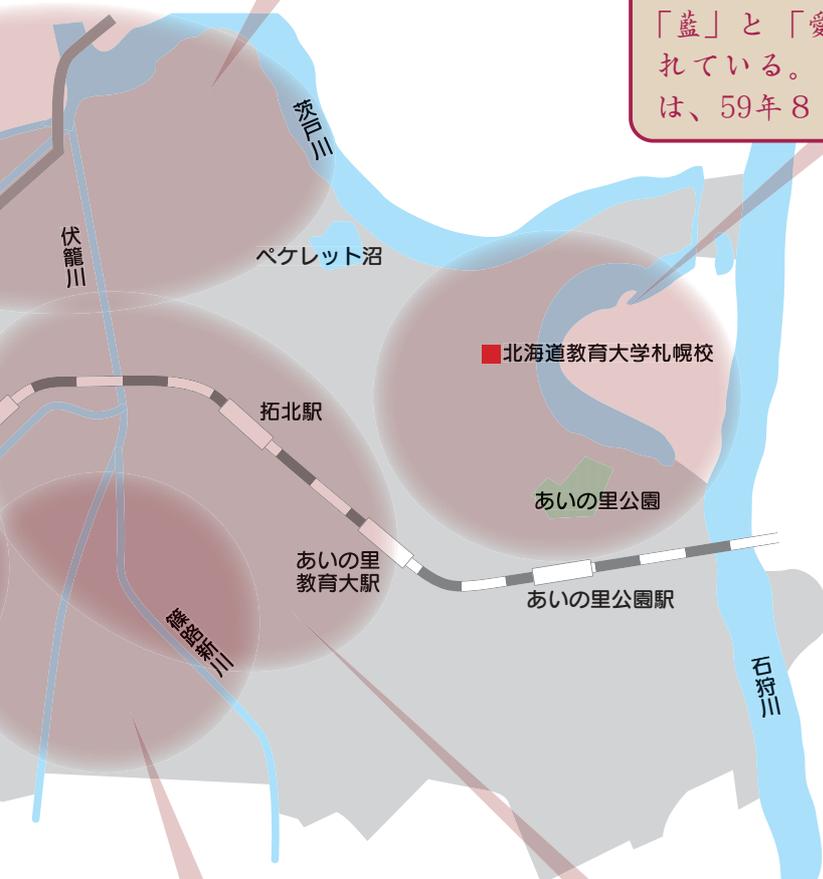


そ地の名 地のに残る、 歴史。

市内でも早くに開拓が始まった北区。区内の地名には、それぞれの歴史が色濃く刻み込まれています。今月は、その中のいくつかをご紹介します。

◆ 茨戸 ◆

アイヌ語で「広い沼」を意味する「パラ・ト」が語源。かつて琴似川の下流がこの辺りで沼のように広がっていたという。この「パラ・ト」の石狩川に注ぐ河口を「パラ・ト・プト」(広い沼の口)と呼び、それが「茨戸太」となり、さらに「茨戸」となったのである。



◆ あいの里 ◆

この地域一帯は、明治時代、染料の藍の栽培や馬産が盛んに行われていた。大正時代には、造田も開始され、昭和40年代には篠路地区随一の米産地となった農業地帯である。53年、住宅都市整備公団(現都市基盤整備公団)の土地区画整理事業として開発が始められ、このとき「あいの里」と命名された。地名の「あい」には、「藍」と「愛」の二つの意味が込められている。町名として実施されたのは、59年8月のことである。

◆ 上篠路(五ノ戸・十軒) ◆

もとの五ノ戸、十軒地区を合わせて「上篠路」と改められたものだが、この地名は古く、文献では今から200年以上前の寛政時代、サケなどの交易場所であった石狩十三場所の一つに「上シノロ」の名がある。しかし、その語源は定かではない。「五ノ戸」は、現在の上篠路地区の北部に位置し、名の由来は最初の入植者が5戸あったからとも、青森県五ノ戸から移住したからともいわれているが定かではない。入植年代も不明である。「十軒」は、五ノ戸の南隣に当たり、明治4年5月に南部藩士10戸が入植したのでこの名が生じた。

◆ 篠路 ◆

江戸時代には、すでにこの付近一帯では「シノロ」という名称が存在していた。しかし、その語源は、アイヌ語で「鍋を浸しておく所」を表す「スウオロ」や、「篠路川の口」を表す「シノロ・プト」であるなどといわれ、多くの文献では意味不明となっていて定説がない。昭和30年3月に札幌市に編入され、篠路町という名称になったが、それ以前の「篠路村」の誕生についても、上荒井村・下荒井村・中島村が合わさったとか、上シノロ・下シノロ・中島村・荒井村が合わさったとか、文献により異説があり定かではない。しかし、いずれも伏籠川流域を指すことは同じである。